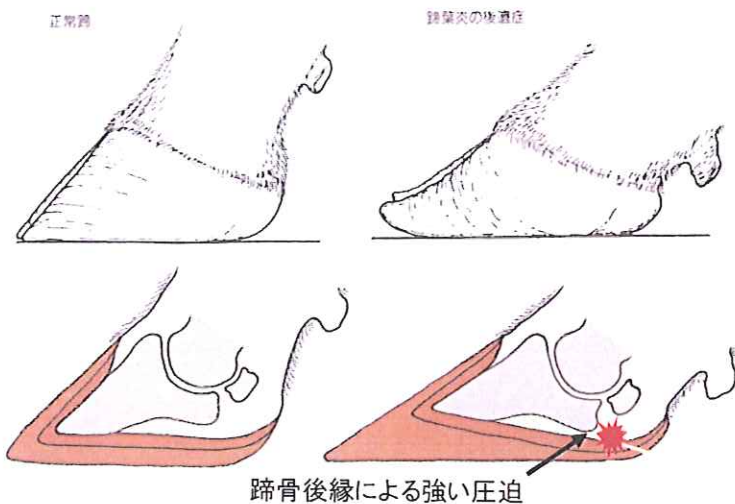


蹄尖の長い蹄のうける物理的ストレス 伸びすぎた蹄や削蹄時の切り損ないなどにより、蹄尖(蹄の先端部分)が過度に長い蹄形の牛をみかけます。このような蹄形の牛は正常な肢勢をたもてず不自然な負重をおこなうこととなります。このことは単に“歩きにくい”ということだけではなく蹄内に大きな物理的ストレスをあたえることとなります。



左の図は蹄形と蹄骨の位置関係を示しています。正常な蹄形での蹄骨の位置・角度は、図の左側のような関係になっていますが、蹄尖が長く、蹄の角度が低くなるにつれ肢勢はどんどん後傾し、蹄骨後縁による組織の圧迫をおこすようになります。

連続的に過度な圧迫を受けつづけた蹄真皮は角質の生産ができなくなり、その一部分だけポッカリ穴が開いたようになります。その穴を壊死組織や肉芽組織が仮充填し、重度の疼痛をとめない



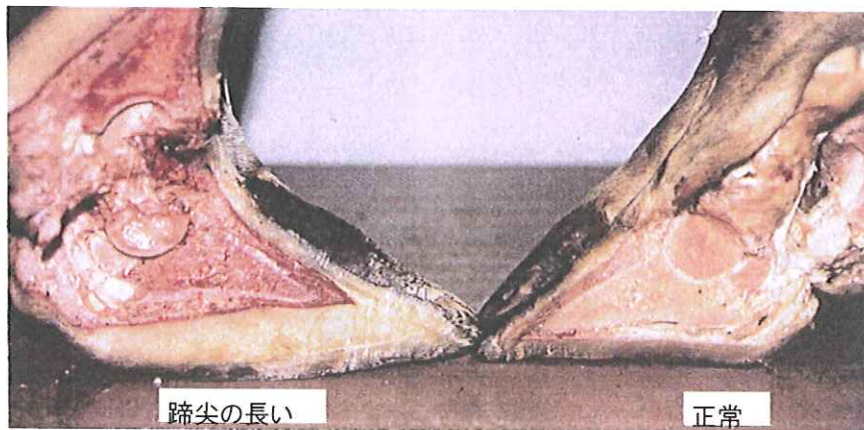
ビッコをひきおこすのが「蹄底潰瘍」という蹄病です。日常的に非常に多く見かける蹄病の一つです(右写真)。

左後肢外側蹄の蹄骨
先端から後縁にかけてアーチ状の形をしておりこの後縁部分で蹄真皮を圧迫

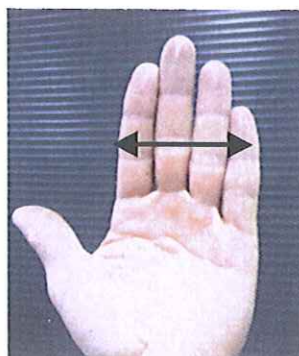
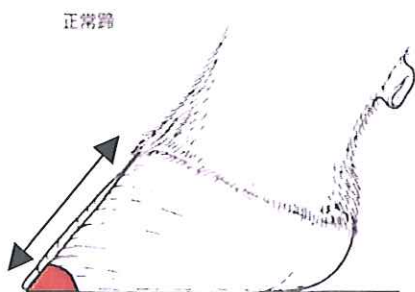


右は正常な蹄と蹄尖の長い蹄の断面写真です。

蹄尖の長い蹄の蹄内では肢勢が後傾し、蹄骨後縁に体重がシフトするようになります。こうなると蹄尖部分の角質は摩耗しにくくなり、さらに過剰に伸びることでさらに後傾するという悪循環に陥ることになります。ではかりに削蹄時に切るべき長さまで蹄尖を切らなかった場合どうなるでしょうか。蹄尖が長いということは蹄底の先端部分の角質も厚いということになるので、蹄底の後方(蹄踵)部分だけは正常な厚さまで削られ、蹄底の先端部分の角質だけ厚い、最初から後傾肢勢の蹄形ができあがってしまっているわけです。



では蹄尖はどれくらいの長さにするべきなのか? ダッチメソッドでは毛の生え際から蹄尖までを7.5cmにし、蹄尖の角度を45~50°に保つことが蹄内のバランスを正常にするといっています。



自分の体の一部で7.5cmしていると便利です。私は手のこの場所の幅が7.5cmなので、削蹄時やパーラーなどで測るのに使っています。